

6 地域環境における抑圧と抵抗をめぐって

——インドの環境運動、チプコの論理——

キーワード：チプコ、環境運動、自律的生存、サットィアグラハ、キー・パーソン

金 沢 謙 太 郎*

Environmental Crises and Responses in the Himalayan Region :
Philosophical and Organizational Continuity of the Chipko Movement

Key Words : Chipko, environmental movement, subsistence, Sattyagraha, key-persons

KANAZAWA Kentaro

The Chipko ('to embrace' or 'to hug' in Hindi) is one of the most celebrated environmental movements in India that originated in Garhwal at the foot of central Himalaya. It was born in the early 1970's on the local women's initiatives to protect trees by hugging. Although Chipko was first practised in Garhwal, it has spread to most of the country, especially the hilly regions. The cumulative impact of the sustained grass-roots struggles along non-violent lines was a re-thinking of the forest management strategy. The movement achieved success in forcing a 15-year ban on commercial green felling in Garhwal Himalaya, and in generating pressure for a national forest policy which is more sensitive to the people's need from the bounties of nature's diversity. What Chipko is trying to conserve is not merely local forest resources but the entire life-support system and options for human subsistence. The strength of the movement lies in its historical, philosophical, and organizational foundation in this region. They are (1) the ethical culture of peasant movements, (2) "female principle" of creating and conserving life, (3) Hindu cosmology giving respect for nature, and (4) Mahatma Gandhi's Sattyagraha tradition to undertake sufferings voluntarily. The movement is not the conceptual creation of any one individual but the expression of an old social consciousness in a new context. Women in Garhwal are the main bearers of this consciousness. Several key-persons who inherited Gandhian Sattyagraha have also played significant roles in the movement.

* 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程

1. 地域概況	4.2. 「実践的キー・パースン」：ヴィムラ ・バフグナ
2. チプロ運動の誕生	4.3. 「複合的キー・パースン」：スन्दル ラル・バグフナ
3. チプロ運動の展開	5. 結論：チプロの論理
4. チプロ運動におけるキー・パースン	
4.1. 「発想的・理論的キー・パースン」： ヴァンダナ・シヴァ	

地域の自然生態系や多様性は、いったいだれが、そしてなぜ保全するのか。本稿では、この問いに関してインドのチプロ運動の事例から追究したい。

1. 地域概況

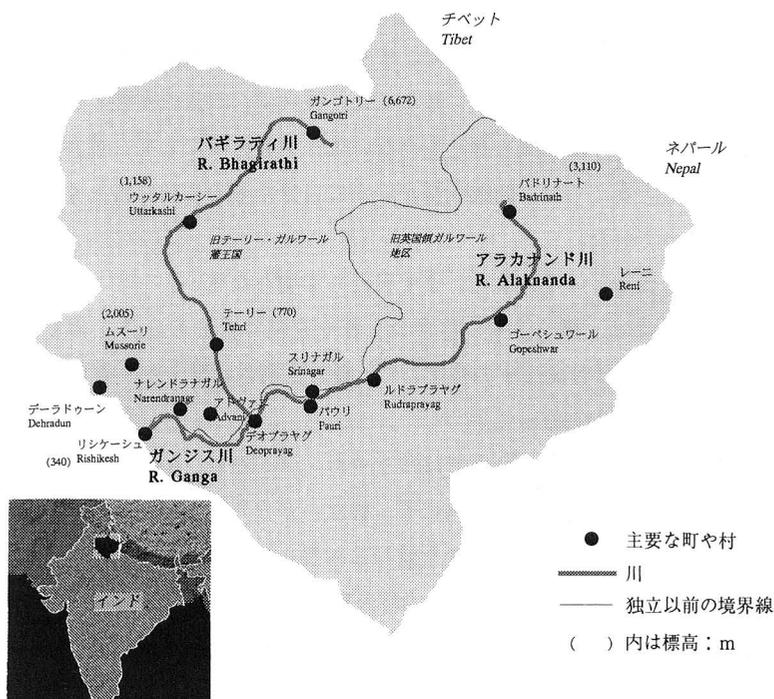
ヒンディー語で「抱きつく」という意味のチプロ (Chipko) は、北インド、ヒマラヤ山脈のガルワール (Garhwal) とよばれる地域から起こったインドで最もよく知られる環境運動である。

ガルワールは、ウッタル・プラデーシュ (Uttar Pradesh: U.P.) 州の北部、北緯29度45分から北緯31度27分、東経77度45分から80度7分にある。この地域の高度差は7,000 mを超える。植生は、熱帯半常緑林・落葉季節林の地帯と山地に大きく二分される。

奥深い谷には、古くからヒンドゥーの巡礼地として、またガンジス河の源として有名なガンゴトリー (Gangotri) やヤムナ河の源とされるヤムノトリー (Yamunotri) がひかえている。ガンジス河の源流バギラティ (Bhagirathi) 河は、デオプラヤグ (Deoprayag) においてアラカナンダ (Alaknanda) 河と合流し、ガンジス河となる (第1図)。

歴史的には、1815年11月30日よりイギリスの統治下に置かれ、英領ガルワールとテリー・ガルワール藩王国とに分割された。イギリス統治下において、鉄道敷設などに伴う開発の急激な波がこの地域の森林を襲った。成長が遅く植林が難しいヒマラヤ・スギは、理想的な木材あるいは鉄道用の枕木として需要が急増した。また、農民が飼いや燃材などの林産物を利用していただ丘陵地帯のナラやカシなどは、開発業者によって、建築資材や家具用に伐り出されるようになった。また、そうした林は、インド森林局によって樹脂のとれるマツ林に置き換えられていった。

イギリスは1865年と1878年にインド森林法を制定し、森林の管理組織に官僚制の導入をはかった。そして、インド全体で14万5千km²の保存 (Reserved) 林と5万2千km²



第1図：インドU.P.州、ガルワール (Garhwal)

の保護 (Protected) 林が指定され、地域住民の日常的な林産物利用は禁じられるようになった [Gadgil and Guha 1992 : 134]。

2. チプロ運動の誕生

チプロ運動は1973年、ガルワールのゴペシュワール (Gopeshwar) という小さな村に端を発している。森林資源を利用した村の産業育成に取り組む協同組合 (DGSS : Dashauli Gram Swarajya Sangh) は毎年、森林局から、一定のトネリコ材の利用権を割り当てられていた。トネリコ材は軽くて丈夫なため、鋤などの農耕具として伝統的に使用されている。しかし、この年、森林局は DGSS に林木の割り当てを認めず、遠く離れたアラハバード (Allahabad) のスポーツ用具メーカーに認めた。

その後、伐採を請け負った業者が村に入ってきたとき、地元の女性たちが先頭に立ち、いのちがけの非暴力で森を守ろうとした。当時、女たちは、燃料や飼い葉を集めるのに、以前は2 kmで十分だったところを7 kmも探し歩かねばならない状況にあった。

同様の動きはガルワールの各地に広まった。1974年、レーニ (Reni) 村に伐採業者が入ってきた。村の少女はそれを見て、すぐに村の女性組織のとりまとめ役であったゴーラ・デーヴィ (Gaura Devi) に知らせた。彼女は、27人の女性と少女たちとともに伐採現場に駆けつけた。聞く耳をもたない伐採業者を前にして、彼女たちは次々と木に抱きついた。女たちは、商業伐採がいかに自分たちの生活を苦しくするかということをよく知っていた。

「どうしても伐るといふのなら、まず私たちを切りなさい」

女たちのなかには、裸で樹木に抱きつく者や荒縄で自分の身体を縛りつける者もあった。彼女らは、4日間寝ずの番をして、脅しと寒さに耐えた。そして、村の2,451本の樹木を伐採の手から守った。

また、アドヴァニ (Advani) 村ではバッチニ・デーヴィ (Bachhini Devi) を先頭に女たちは森林を守ろうとした。皮肉にも、彼女らが立ち向かった相手とは、バッチニ・デーヴィの夫、すなわち開発業者を兼ねる村長らであった。

あるとき、政府の森林官がいった。「村人たちよ、森林が何を生み出すか知っているか。樹脂に木材に外国通貨だぞ (“Kya hain jungle ke upka? Lisa, lakri aur vyapar”)

女たちとともに闘うドーム・シン・ネーギ (Dhoom Singh Negi) は、そのとき有名なスローガンを打ち出した。「森が生み出すものを本当に知っているのか。それは土壤に水にきれいな空気だ。土・水・空気なくして生きていくことはできない」 (“Kya hain jungle ke upkar? Mitti, pani aur vayar. Mitti, pani aur bayar, Jinda rahne ke adhar”)

同じくガルワールのバディヤルガー (Badiyargarh) 村では、スンデルラル・バフグナ (Sunderlal Bahuguna) が森林の伐採に対して、死をも覚悟した抗議の断食を始めた。しかし、その11日目に彼は逮捕拘留された。この出来事によって、村人たちの抵抗はさらに強まり、詩人のガーナシャヤム・ラトゥーリ (Ghanashayam Raturi) を中心とする何千もの人びとが周辺の村々から駆けつけた。人びとは、業者が引き揚げるまで森のなかで11日間にわたり非暴力の抵抗を続けた。

チプロコのいのちがけの「抵抗」の背景には、ヒマラヤ山麓で頻繁に起きていた洪水による被害があった。特に1970年7月の大雨によって、アラカナンド河が氾濫し、さまざまな被害を引き起こした。100km²の土地が水浸しになり、366の家屋がつぶれ、6つの橋と10の道路、200km²の水田が決壊した [Weber 1987: 45-6]。

1960年代、商業用木材の切り出しが断続的に行なわれた。地元の人びとは、森の緑が土の茶褐色へと変わっていく様子に危機感を抱いていた。

3. チプロ運動の展開

1973年から1975年にかけて、スデルラル・バフグナはチプロのメッセージを伝えるべく、演奏家や歌手などを伴って、およそ1,400kmの道のりを行進した。彼らは森林を守ろうというスローガンや詩をうたいながらヒマラヤの村々を歩いて回った。それを見物していた村人たちは、夕方の集会でチプロの話しを聞きにきた。翌朝、村の首長の紹介状を手にして、バフグナらは次の村へと行進していった。パドヤットラ (Padyatra) とよばれるこの行進は、ヴィムラ・バフグナ (Vimla Bahuguna) やラダー・ベーン (Radha Behn)、シャーシ・ベーン (Shashi Behn) といった女性や学生らの参加によって支えられた。彼らは、特に洪水や土砂崩れによって被害を受けた地域を鼓舞して回った。

このころ、チプロ運動の内部では、二つの異なる考え方が表面化した。スデルラル・バフグナは地域の森林は、地域内の燃材や飼料、建築用材のニーズに使用されるべきで、森林生態系の破壊的状况において、商業目的の伐採は一切禁止すべきであると主張した。これに対して、DGSSの設立者であるチャンディ・プラasad・バット (Chandi Prasad Bhatt) は、運動の目的は伐採の全面的な禁止ではなく、森林資源利用の権利を守ることにあると唱えた。「経済的貧困は技術的に解決可能」というバットの考え方は、「環境開発モデル」ともいわれている [Shiva and Bandyopadhyay 1987 : 33]。

しかしながら、二人の考え方の基本は、ガンディー主義の伝統に根ざしている点で一致している。ヨーロッパ人女性で、ともにマハトマ・ガンディー (Mahatma Gandhi) に師事したミラ・ベーン (Mira Behn) とサララ・ベーン (Sarala Behn) は、その後半生において、ヒマラヤ山麓のガルワールやその周辺に移り住んだ。彼女らは山岳地域の人びとの森林生態系への関心を高めると同時に、女性の地位向上にも力を尽くした。ラダー・バット (Radha Patt) はサララ・ベーンの後を引き継いで学校の運営をしながら、チプロの女性たちを奮い立たせた。バフグナもバットも二人のベーンから大きな影響を受けていた。

その後、1981-1983年にバフグナは再び4,700kmに及ぶパドヤットラを敢行し、「エコロジーは永続するエコノミー」というスローガンを広めた。一方、バットは植林活動を組織的かつ継続的に行ない、1981年までに30万本を超える植林を施した。当時は、政府による苗木の定着率が10-15%であったのに対して、バットらの植林ではそれが66-86%を示した [Kumar and Juyal 1983 : 10]。

ガルワールの各地で起きた草の根の運動は、やがてインド全体の森林生態系への関心をよび起こした。その訴えは、やがて国の政策決定の最高レベルまで届いた。すなわち、1980年当時のインド首相、インディラ・ガンディー (Indira Gandhi) による U.P. 州ヒマラヤの商業伐採を15年間禁止という進言へと結実する。それを受けて、チプロ運動のバフグナと U.P. 州の高官らとの間で、次のような覚え書きが交された。

- (1) 標高1,000m以上の森林は商業目的に伐採することを禁ずる。なぜなら、残された森林面積は限られ低密度であるため、年間の森林生産物の産出量が、地域の人びとの生活必要量を満足できない状況にあるからである。
- (2) 樹脂採取によって傷ついた樹木は保護されねばならない。
- (3) マツなど針葉樹の森林において、飼い葉や燃料用の広葉樹の植林が必要である。丘陵地域に緑を復活させるべく、住民参加によって、食料、飼い葉、燃料、肥料そして繊維のための植林がなされなければならない。
- (4) 森林局の全組織が、植林事業に積極的に関わっていかねばならない [Weber 1987: 140]。

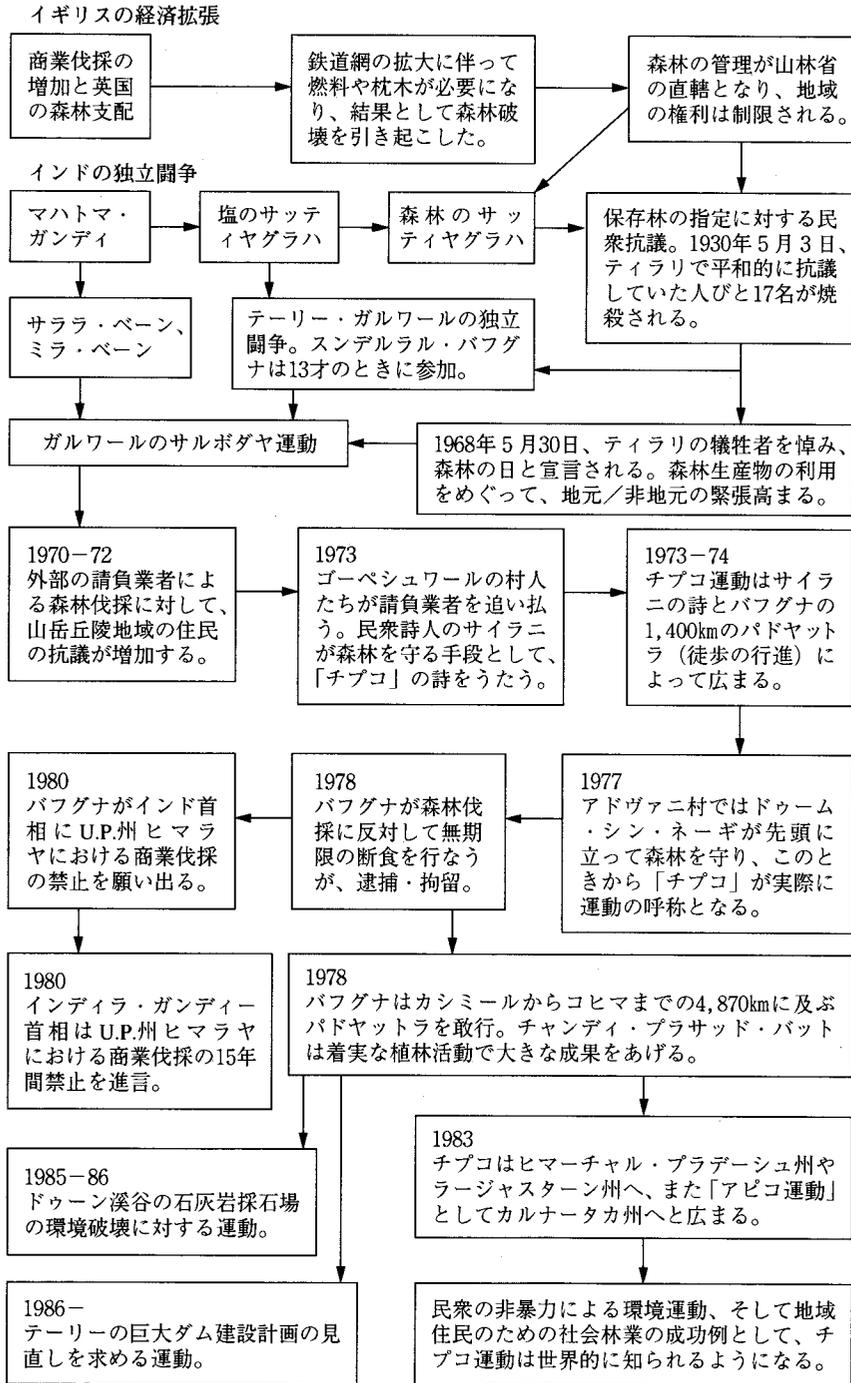
チプロ運動はやがて、「アピコ (Appiko) 運動」(カンナダ語で「抱きつく」の意) やさらには巨大ダム建設や鉱山開発の反対運動などへと広がり、世界で最もよく知られる草の根の環境運動の一つとなった (第2図)。

チプロ運動は、なぜ広範な支持を得て、国の森林政策を変えるまでに至ったのか。あるいは、政府や警察に守ることのできなかつた森林を、なぜ地域の住民たちが守ることができたのか。この運動の求心力や持続力の源泉は何か。こうした関心のもとに、筆者は1996年春にチプロ運動の担い手たちに対する聞きとりを実施した [金沢 1997; 2000]。

4. チプロ運動におけるキー・パーソン

「キー・パーソン」ということばを造語したのは哲学者の市井三郎である。市井は、「哲学的分析」の注のなかで次のように述べている。

「リーダーシップ」という語が含意する「リーダー」という言葉を用いると、そこに「リード」される多数に対する少数者たる「リーダー」あるいは「エリート」のなんらかの政治的支配がある、と考えられがちであるが、わたしがわざわざ「キー



第2図：チプコ運動の展開

パースン」という妙な造語を用いるにいたったのは、その既成概念を避けるためである [市井 1963: 33]。

市井はさらに歴史における進歩の概念が、これまで、最大多数の最大幸福という、快樂の増大を尺度としてきたことを批判し、「不条理な苦痛を軽減するためには、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身にひき受ける人間の存在が不可欠」とし、歴史の大状況の変革期におけるそのような人間を、「キー・パースン」と定義した [市井 1971: 148]。

翻って、先進工業国の環境運動において、その「エリート」主義的な傾向がしばしば指摘されている (例えば、[戸田 1994])。しかしながら、チプコの場合、考え方の枠組みにおいてそのような傾向は見当たらない。「エリート」あるいは「リーダー」は不在である。しかしながら、実際に現地を歩き、人びとの話しを聞くにつれて、その運動を語る上で欠くことのできない複数の人物の存在とその経歴に強い興味を抱いた。圧倒的に開発優位の状況のもと、草の根の運動によって、地域環境を守る、その重要なチャンネルと考えられるのが、「キー・パースン」である。ちなみに、筆者がここで「キー・パースン」とよんでいる人びとは、自身のことを「共働者 (Co-workers)」あるいはメッセージの「伝播者 (Spreaders)」と称している。

社会学者の鶴見和子は、市井のいう「キー・パースン」を「地域の小状況のなかでのより日常的な変化の担い手」と再定義し、「発想的・理論的キー・パースン」、「実践的キー・パースン」、「政策的キー・パースン」という類型化を試みている。鶴見のいう「政策的キー・パースン」は政治や行政の権力をもつ人をも指しているが、宇野らが指摘しているように「権力に関係した人は地域的リーダーと違って、キー・パースンとは使い分けたほうがよい」と思われる [宇野・鶴見 1994: 239]。ここでは、チプコ運動の「キー・パースン」の類型化に関して、以下のような試論を提示すると同時に、3人の人物をとり上げ、彼らの個人史の一端を紹介したい。

(i) 「発想的・理論的キー・パースン」

サララ・ベーン、ミラ・ベーン、サイラニ、ラトゥーリ、ヴァンダナ・シヴァ

(ii) 「実践的キー・パースン」

ヴィムラ・バフグナ、ラダー・ベーン、シャーシ・ベーン、ラダー・パット、
ゴーラ・デーヴィ、バッチニ・デーヴィー、イトゥワリ・デーヴィ、チャムンデ
イー……

(iii) 「複合的キー・パースン」

スデルラル・バフグナ、チャンディ・プラサッド・バット、ドゥーム・シン・ネーギ

「発想的・理論的キー・パーソン」のうちサララ・ベーン、ミラ・ベーンはともに外国人女性でマハトマ・ガンディーの信奉者であった。この二人の存在は、ほとんど全てのキー・パーソンに大きな影響を残した。サイラニとラトゥーリはともに詩人であり、チプロのメッセージを大衆に広く伝えるユニークな媒介者となった。

「実践的キー・パーソン」のほとんどは女性である。その数の多さは、チプロ運動が草の根の環境運動であって、一般に、「女性が中心になって行なわれている森を守る運動」といわれる由縁である。キー・パーソンとともに無数の無名の女性たちが運動を支えている。

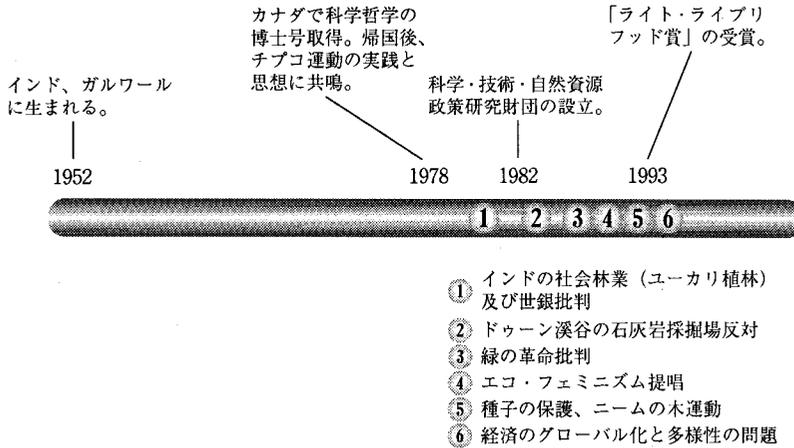
「複合的キー・パーソン」として、S・バフグナ、C・P・バットを含む3名の男性を挙げることができる。彼らは、運動の理念や戦略を練るだけでなく、フルタイムの実践を継続している。S・バフグナは、森林の保全には知・行・信愛(Gyan, Karma, Bhakti)の三要素の組み合わせが必要と説いている [Bahuguna 1992: 486]。

4.1. 「発想的・理論的キー・パーソン」：ヴァンダナ・シヴァ

子どものころの夢は物理学者になることで、とりわけアインシュタイン (Albert Einstein) にあこがれを抱いていた。今も彼女の職場には自分で作ったアインシュタインの胸像が置かれている。シヴァはカナダへ留学し、帰国後、しばらく原子力関連の研究をしていた。しかし、次第に科学の社会的側面への関心が高じて、1978年、S・バフグナを彼のアシュラム (修行所) に訪ねている。

1982年、自宅の牛小屋を改造した建物において、「科学・技術・自然資源政策研究財団」を設立する。以降、森林問題、水問題、生物多様性や遺伝子資源問題などで次々と先駆的な論点を提示している (第3図)。

彼女の著書の訳者で林学者の熊崎実によれば、シヴァの生態系や生物多様性危機論に通底しているのは、「モノカルチャーを基準とする思考様式、つまり『精神のモノカルチャー』が認識の世界から多様性を追放し、それが現実の世界での多様性の喪失を引き起こしているという点にある [熊崎 1997: 42]。また、シヴァは「地域の環境保全に取り組む一方、地域を破壊する地球的根源を見逃してはならない」といい、「Think Globally, Act Globally (広く地球のことを考え、地球規模で行動しよう)」とよびかける。同時に、彼女の論理は、チプロ運動の担い手としての「実感」と深く結びつ



第3図：ヴァンダナ・シヴァの活動年表

いている。シヴァは、自身の力やエネルギーの源泉について筆者に次のように語った。

多分、それはとても深く感じることに関係がありそうですね。私は自然を深く感じます。本当に深く感じています。そして、割の合わない条件でもよく働く、善良な人びとが、搾取されているのを見るとき、私は深く感じます。なぜなら、彼らが作ったものをだれかがもち去ってゆくのですよ。私は、自然の搾取も人の搾取も見るに耐えられません。ですから、私は人びとを尊敬します。自然に対して、とても深い畏敬を感じます。私もそれらとつながっているのだと思います。私は自然を深く感じます。私はつながっているのです。私は深い慈しみを覚えるのです。そして、私の闘うエネルギーは、その慈しみの情が暴力を許さない抵抗へと転化することから生じるのでしょう。その種の暴力を目のあたりにすることは、私には耐えられないことなのです。

4.2. 「実践的キー・パーソン」：ヴィムラ・バフグナ

ヴィムラ・バフグナは、1931年ガルワールのテーリーに生まれる。父親は森林官、母親は王室僧侶という高位カーストの家庭に生まれ育った。しかし、彼女の両親ともいわゆる偏見や差別的な考え方にとらわれない人物であった。17才のときに、マハトマ・ガンディーに師事した英国人女性、サララ・ベーンと出会う。サララ・ベーンはアルモラ地区のカサウニ (Kasauni) の山間地において、女子の教育のためのアシュラ

ムを創設していた。ヴィムラらはそこで読み書きの他、毎日の生活に必要な全ての技術、例えば料理や農業、糸紡ぎ、健康管理、その他さまざまな社会活動を学んだ。彼女は25才のとき、当時国民会議派の地方組織の書記官だったS・バフグナと結婚し、テーリーの町から31km山奥に入ったシルヤーラ (Silyara) に2つの小屋を建て、そこで新たなアシュラムを開設した。そしてチプロ運動が起こった1970年代、ヴィムラはテントを張った森のなかで闘っていた。

ヴィムラは、28キロまでやせ、白内障を患いながら現在も、アシュラムを運営し続けている。彼女にとって最も大切なことは、「環境を守ること、女性の啓発、そしてバランスのとれた開発」と語る。

4.3. 「複合的キー・パーソン」：スデルラル・バグフナ

スデルラル・バグフナは、1927年テーリー・ガルワール藩王国、マロラ (Marora) 村に生まれる。13才のときに、ガルワールでは最も有名な独立の闘士であるシュリ・デヴィ・スーマン (Shri Devi Suman) と出会う。スーマンはのちに84日間の抗議の断食の末、偉大なる「殉死」を遂げた人物である。

バフグナは国民会議派の要職を務める傍ら、ハリジャン (Harijan) すなわち不可触民 (文字通りの意は神の子) の地位向上や恥ずべき慣習に対して闘っていた。彼は、主要な寺院への入場ができなかったり、大学や学生寮で他の生徒と別々に食事をとるハリジャンの子どもたちのために学生寮を建て、彼自身もそこで寝泊りをしていた。

ヴィムラとの結婚後、チプロのメッセージを伝えるべく、1973年から数千kmに及ぶパドヤットラを何度も敢行した。また、森林の競売に対して幾多の厳しい断食でもって抵抗した。ガルワールでは現在、完成すればヒマラヤ山麓で最大規模となるテーリー・ダムの建設が進行している。彼は、1989年よりダム計画阻止の意思を示す象徴的場所として、ブルドーザーの行き交う工事現場に、掘建て小屋を建て、そこで生活している。

彼が重視するのは、3つのA “Austerity, Alternatives, Afforestation”、すなわち「簡素・もう一つの開発・植林」である。彼にとって開発と環境保全、社会改革は相互に分ち難く結びついている。さらに、その開発哲学は深い宗教意識から生まれてきたものである。バフグナは、釈迦 (ブッダ) のことばを引き合いにして、繁栄 (Prosperity) ではなく、基礎的ニーズを満たすことが重要だと筆者に語った。

人間の欲望には際限がない。だれか完全に欲望を満足した者がいるだろうか。欲

望の強い人間は決して満足しない。彼は常に最ものを欲する。だから、ブッダはクリスナチャリア、すなわち欲望の終わった世界を追求すべきだと説く。基礎的ニーズを満足するということに関しては、今世紀の賢人、M・ガンディーが次のようにいっている。自然は周知の通り、ニーズを満たしてくれる。欲望を満たしてくれるものは何もない。全てのもののニーズは十分満たされるが、欲望を満足し得る者はだれもない。もし欲深い人が近くにいれば、あなたはもっと物欲が増す。彼は決して満足しない。これが我々がなすべきことだ。そして、ブッダはこういった。真の開発は永続的な平和、幸福、基礎的ニーズの満足にあると。繁栄ではなく、ニーズの充足である。それが幸福の源泉となる。幸福の源泉はあなたの外側にあるのではない、あなたの内側にある。

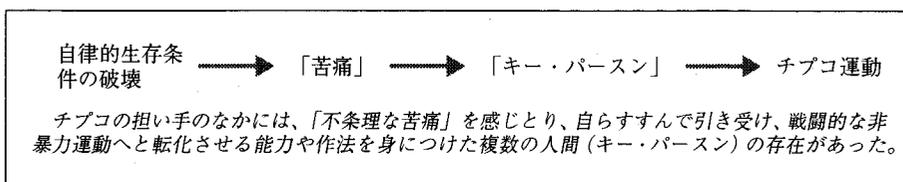
5. 結論：チプコの論理

チプコ運動の直接のきっかけは、森林の乱伐による洪水や土砂崩れの被害の拡大及び水、飼料葉や燃料といったバイオマスの不足であった。しかし、この運動は単に人間の物理的生存条件の破壊に対する異議申し立てにとどまらなかった。チプコの担い手たちは、自然生態系破壊や森林資源搾取の背後にある開発の帝国主義的側面やそのもとになっている西欧近代的な科学知識・認識、さらにその下位の人間の欲求や本性といった人類学的性質まで鋭く問うている。

一方、そうした「抑圧」の多元的構造に対抗する論理とは何か。チプコの「抵抗」に際立った特質と力をもたらしたのは、地域の社会構造や精神構造の蓄積である。彼女らの「抵抗」の基盤には、生命を与え生命を維持する「女性原理」があり、自然に畏敬を感じるヒンドゥー教の思想があり、さらに自らすすんで苦痛を引き受けるガンディーの戦闘的非暴力の伝統がある。

さらに、インド人研究者のラーマチャンドラ・グーハによれば、チプコ運動の特質は、一般によく知られている側面、すなわち世界に名高い環境運動に加えて、その知られざる側面、すなわちこの地域の農民運動の真髄との融合にあるという [Guha 1989: 196]。チプコ以前の歴史から、役人の専制や非行に対して、非協力、パドヤットラ、君主に願い出る越訴といった手法で「抵抗」する農民運動の倫理的文化、伝統があった。

第4図は〈抑圧〉と〈抵抗〉を結ぶ論理、すなわち、なぜチプコ運動が起きたのかを示している。生身の現実的存在である人間は生命であり、自己の正常な状態をその



第4図：チプロ運動の論理（なぜ運動が起きたのか）

身体的、社会的、精神的の局面において維持する機能を備えている。しかし、現実社会はその自律的メカニズムを破壊し、依存的なものへと改変させている。多様性を生産の基盤とする人びとにとって、自律的生存条件の破壊は、「苦痛」という主観的認識へと直結している。人びとは生存を脅かされるほどの苦しみや辛さのなかであって、怒り、嘆いて、抵抗を始める。チプロの担い手のなかには、自らの責任を問われる必要のないことから受けるさまざまな「苦痛」を感じとり、それを自らすすんで引き受け、戦闘的な非暴力運動へと転化させる能力や作法を、伝統的ないし経験的に身につけている複数の人間（キー・パースン）の存在があった。

参考文献

- Bahuguna, S.
1992 The Message of Aranya Culture and Tradition: A Continual Renewal. In Shiva, V., Bahuguna, S. and Buch M N. (eds.), *Environmental Crisis & Sustainable Development*, Dehra Dun: Natraj Publishers, pp.483-487.
- Gadgil, M. and Guha, R.
1992 *This Fissured Land: An Ecological History of India*, Delhi; New York: Oxford University Press.
- Guha, R.
1989 *The Unquiet Woods: Ecological Changes and Peasant Resistance in the Himalaya*, Delhi: Oxford University Press.
- 市井三郎
1963 『哲学的分析』岩波書店。
1971 『歴史の進歩とはなにか』岩波新書。
- 金沢謙太郎
1997 「ヴァンダナ・シヴァ——『実感』と『論理』のエコロジスト——」井上孝夫編『環境社会学研究』4 千葉大学教育学部社会学研究室, 93-100。
2000(印刷中) 「インドの環境問題」日本環境会議/「アジア環境白書」編集委員会編『アジア環境白書2000/01』東洋経済新報社。
- Kumar, M. and Juyal, N.
1983 From Protecting Trees to Integrated Development: New Development of the Chipko Movement. *Himalaya: Man and Nature*, May, pp. 9-11.
- 熊崎 実
1997 「生物多様性をめぐる第三世界の視点」『社会運動』213, 42-45。

Shiva, V. and Bandyopadhyay, J.

1987 Chipko : Rekindling India's Forest Culture. *The Ecologist* 17(1), 26-34.

戸田 清

1994 『環境的公正を求めて——環境破壊の構造とエリート主義——』新曜社。

宇野重昭・鶴見和子編

1994 『内発的発展と外発的発展——現代中国における交錯——』東京大学出版会。

Weber, T.

1987 *Hugging the Trees : The Story of the Chipko Movement*. New York : Viking Penguin.